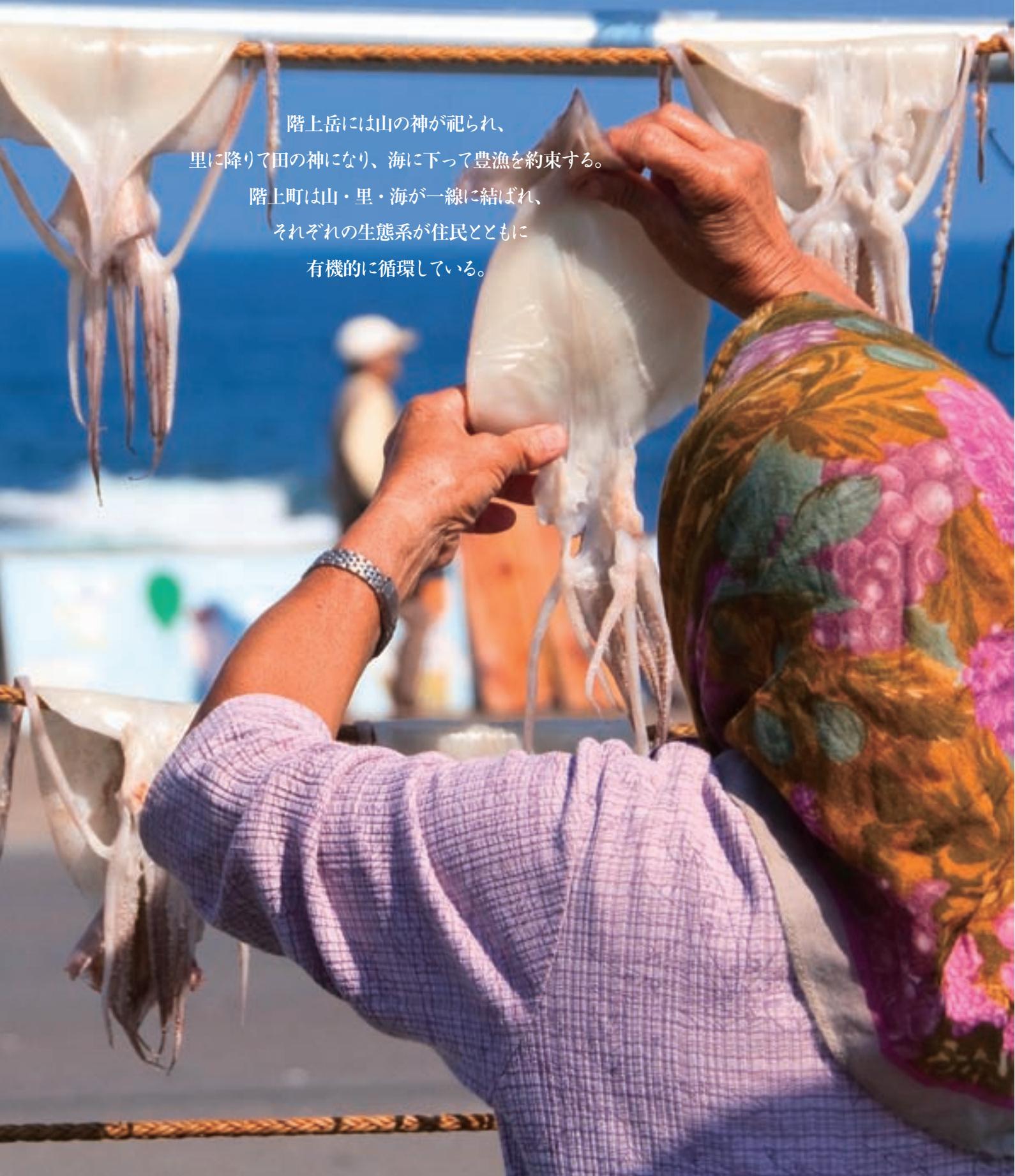


階上地元学

山人・里人・海人が伝える 階上フィールド・ノート

階上岳には山の神が祀られ、
里に降りて田の神になり、海に下って豊漁を約束する。
階上町は山・里・海が一線に結ばれ、
それぞれの生態系が住民とともに
有機的に循環している。



「山」を考へる。

「案内人」——村岡勉さん（はしかみYYクラブ会長）

豊かな自然の息吹に満ちた階上岳は、人々の心を優しく包む町のシンボルです。

山岳の少ないこの地方で、階上岳は小・中学校、高等学校の校歌や小唄、音頭、詩歌に詠まれるなど、古くから町やその周辺の人々にとつてシンボリック的存在として親しまれてきました。

春先の山野草から初夏のヤマツツジの群生、秋の紅葉、山菜やキノコの山の恵み、冬山登山など四季折々の楽しみ方があり、健康目的で毎日のように登るという地元の特レッカーや、毎週のように登山をしている山友会などの常連もいます。一月二日には青森県内で最初に「米光を拝する山」として大勢の人が元朝登山に集まります。

また、山頂には嶽大明神が祀られ、昔から信仰の厚い山であり、北麓を源流とする道仏川や支流の寺下川、鳥屋部川、南麓を源流とする松館川など、水をもたらず山でもあります。

さらに、昭和十二年（一九三六）から鳥屋部で乳牛ホルスタイン種を導入以来、現在の黒毛和種や綿羊を育てる町営牧

きました。

YYクラブは、会員三八人中三〇人が階上町在住者のウォーキングの会で、結成のきっかけは階上中学校親父の会が、子どもたちと一緒に「十和田湖一周五〇キロ」のウォーキングに参加したことからでした。その後、石鉢ふれあい交流館を拠点に、主にウォーキングと階上岳登山でわいわいと楽しく運動をして、Y体の服を着られるようになることを目的に正式結成。平成十七年（二〇〇五）に「階上岳横断ウォーク二四キロ」を初開催しています。

平成二十三年（二〇二一）九月十日のこの日は、十月二日の第七回横断ウォークのための二回目のコース点検で、村岡会長、宗前光雄相談役、窪百合子副会長、そして会計の大沼澄夫さん四名が、Aコースといわれる「寺下・巨木コース（二四キロ）」を確認歩きました。

これは交流の森広場を起点に、つくし森—石倉展望台—町営放牧場広場—町営放牧場裏側旧道—寺下観音—銀杏の木—階上庁舎—とちの木—森の交流館の最長コースで、ウォーク開催日はほかにBコース「石倉放牧場コース（二キロ）」と、Cコース「つくし森コース（六キロ）」があります。

秋雲がうっすらと広がる青空の下、九

北上高地の北端ともいえる階上岳（標高七四〇メートル）は、牛の臥しているような姿から臥牛山とも呼ばれ、古代の陸奥国時代から地元の人々に崇められてきました。その北東山麓には、神龜年間（七二四〜七二九）に大僧正行基が海潮山應物寺として開山したと伝えられる寺下観音があり、階上町のルーツともいわれています。今ではキャンプ場やふれあい牧場などの施設が整備された大アウトドア体験エリア、畜産の一大拠点牧野として、登山者のみならず町内外の多くの人々に親しまれています。今回、はしかみYYクラブ会長の村岡勉さんに案内していただき、階上岳横断ウォークの二四キロコースに挑戦してみました。



はしかみYYクラブ会長の村岡勉さん



交流の森広場からスタートして歩くYYクラブのメンバー



しるし平にはたくさんの登山者



「石倉展望台」へ至る緑の回廊



巨岩に登り眼下を見渡す



所々で眼下に八戸市街地や太平洋が見えてくる



「石倉展望台」で一休み

時三十分交流の森広場からスタートしました。

頂上まで約二時間のうち、しるし平の「つくし森」まで約一時間。変化に富んだ木々の植生を眺めながら、ひたすら歩きました。

階上岳登山といえば最もポピュラーな

場に至るまで、町の畜産を支えてきましたが、八合目付近の大開平に、階上町が生んだ歌人・木村露村の歌碑「乳呑ます牛のまなこにふるさとの山はさかさまに映りてゐにけり」があることから、畜産と山の麓の人々との関わりが深かったことがうかがえます。

こうしてみると、階上町のルーツといわれる寺下観音堂が、北東山麓を聖地として建立されたのもうなずけます。

階上地元学①「山」を考へる、としたこのコーナーでは、毎年十月初旬に「階上岳横断ウォーク」のイベントを開催している「はしかみYYクラブ」の村岡勉会長に、階上岳の魅力を紹介していただき

のは、鳥屋部登山口から入るルートで、しるし平から大開平に至る家族向けコース、しるし平のあたりで分岐し、大山津見神社を通って大開平、頂上に至る大人向けコースがあります。最短で四五〇メートル、約二時間の行程です。このほか、西登山口（田代口）から奥の院、ホイホイ岩を通って南側から頂上に至るルートがありますが、村岡さんによると東側を迂回して岩場を通る「修験者・クマコース」や、西尾根沿いの「チョコモランマコース」など、知っているだけでも一コースはあるとか。そのほかにもいろいろなコースがあり、それだけ多彩な魅力あふれた山なのです。

横断ウォークではこれらの登山ルートと違い、ほぼ車道を利用しています。それは三百人前後が参加するので、道に迷ったりしないためなのですが、車道とはいえ、山に来るのを目的とした車がほとんどで交通量は多くなく、変化に富んだ木々の植生を眺めながらのウォーキングは快適でした。

休憩所・トイレ・水場のあるしるし平の「つくし森」まで約一時間のところを四五分、一度登山道を横切って、ひたすら歩きました。併行して走る登山道は、登山口からすぐに樹林が密集した山道が続き、次いで竹やぶが現われ、杉木立を

過ぎるとミズナラなどの広葉樹に変わります。こちらの道では、歩き慣れた登山者には三〇分ほどの行程でしょうか。

頂上方面へのコースと分かれて「石倉展望台」へ。巨岩の上からの眺望は圧巻で、遠くは八甲田連峰まで見渡せる絶景ポイントです。

標高が上がリ、カーブに差し掛かる所々で眼下に八戸市街地や太平洋が見えてきます。階上岳愛好者のほとんどの人が挙げる特有の風景です。そして路傍にはむき出しの岩石が目立ってきます。

そもそも階上岳は、約一億年前に地下約五キロの地層を貫いて入り込んだ花崗閃緑岩が隆起してできた山で、それが削られ分解してなだらかな残丘状山容となっており、いわば山全体が花崗岩でできているのです。路傍にある岩石は道路開削で出てきたもので、村岡さんに言わせると品質のいい花崗岩なので、石彫としてオブジェのように並べたら面白いのでは、とのこと。確かに妙案のように思えました。

やがて着いたのが巨岩の親分格がせり出した「石倉展望台」。横断ウォークでは立ち寄りませんが、ここからの眺望はだらかな牧野を左右に見ながら下りの道になりました。やがて山道になり木立が追つくと、クルマやヤマブドウなどが目につくようになり、疲れが取れるからと、ヤマブドウを食べながらの道行き気分。それにしてもY Yクラブの皆さんの健脚ぶりはさすがで、足の運びも呼吸にもまったく乱れなく、一定のリズムで歩みを刻んでいました。十二時四十分、歩き始めてから三時間一〇分ほどで中間点(約二キロ)の寺下観音に着きました。歩数計は二万三千歩を示しています。

寺下観音は糠部三十三観音の第一番札所という由緒があり、階上町民のみならず八戸地方の信仰の拠点にもなっています。境内には仁王門、西国三十三観音の石仏、鐘楼があり、堂内には八戸藩主の俳諧奉納額、蛇口伴蔵の水利事業祈願の掲額等があります。

ここで昼食休憩後、十三時三十分再びスタート。休んだためか、かえって急に足取りが重くなったような気がします。一五分ほど舗装道路を外れて右折、町指定天然記念物「銀杏木窪の大銀杏」前を通り、十四時二十分に国道四五号へ出て階上町役場を左折。十五時には八キロ地点の階上中学校前を通過しました。



「茨島のトチノキ」前を通過



国道45号に出るとコスモス街道に



台風で一部が折れた「銀杏木窪の大銀杏」



寺下観音堂にある西国三十三観音の石仏



なだらかな牧野が続く「町営放牧場」



牧野にいた黒毛和種



ヤマブドウを採る村岡さん



階上町特産「階上早生」のそば畑の前を横切って



「第7回階上岳横断ウォーク」参加者の記念撮影

このあたりになると歩くことが目的の「ウォーク」の意味が実感を持って分かってきます。そして、完歩したあとの子どもたちの達成感、顔の輝きを見たいために横断ウォークを続けているという村岡さんたちの言葉の意味も。

十五時三十分、県指定天然記念物「茨島のトチノキ」前を通過。丁字路を右折するとあとはほぼ直線で、起点隣の「臥牛の塔」が見えてきます。十六時二十分ついにフィニッシュ。二四キロ、昼食時間を

圧巻で、遠くは八甲田連峰まで見渡せる絶景ポイントです。そればかりではなく、展望台へ至るまでの樹陰の回廊は、その爽やかなグリーンシャワーで疲れを癒してくれます。

ここからは町営放牧場チェック地点を経て、東方の寺下観音方面へ下山するため、「つじの森キャンプ場」やテレビ塔のある大開平、そして頂上や南岳のある方面と分かれるのですが、もちろん設備の整ったキャンプ場や、ヤマツツジの群生する大開平、龍神水の湧く山頂付近も魅力たっぷりです。ちなみに村岡さんの推せんするビューポイントは、頂上から見た南岳方面に連なる折爪岳や岩手山が、夕日の中にシルエットとなって浮かび上がる光景だそうです。

中間点の寺下観音で昼食をとり再びウォーク開始。急に足取りが重くなり、歩くことが目的の「ウォーク」の意味が、実感を伴って分かってきました。そして、十六時二十分ついにフィニッシュ。

チェック地点の六キロを過ぎると、な

除けば約六時間、ゆっくりペースながら二万七二〇〇歩の完歩達成の瞬間でした。

* * *

震災復興チャリティーウォークを兼ねた十月二日の本イベントには約三〇〇人も参加があり盛況でした。

十月二日、予定通り本番の第七回階上岳横断ウォークが開催されました。スタート時点は快晴、後半天候が悪化して雨にあつてしまいましたが、震災復興チャリティーウォークと銘打った今回は、階上中、道仏中の生徒も含め約三二〇人も参加者がありました。Bコース「石倉放牧場コース二キロ」には、浜谷町長も参加、先頭を切る健脚ぶりでした。

参加者が歩いている間、裏方のY Yクラブやボランティアスタッフの町職員などが完歩証を準備、地元的女性陣はゴール後の豚汁の準備で大忙し。こういった連携の素晴らしさも、町のシンボル「階上岳」があればこそと、再確認したイベントでした。

村岡さんは、「山と海の両方を楽しめる町は数少ない。恵まれた自然環境を利用し、階上岳から階上海岸へとつながる階上ならではのルートを実現できれば」と、夢をふくらませていました。



うに飯

ごんぼっぱ餅

ヒロの味噌かい焼き

春



麩の味噌漬け・梅漬け

いちご煮

ばほり餅

夏

コラム ②

伝統料理

臥牛の郷生活研究連絡協議会では、階上町の食文化を次世代へ伝えようと平成21年12月に『階上町の伝統料理』を刊行しました。ここではその中から代表的な12点を紹介します。



あぶらめ汁

かぼちゃ粥

そばがき

秋

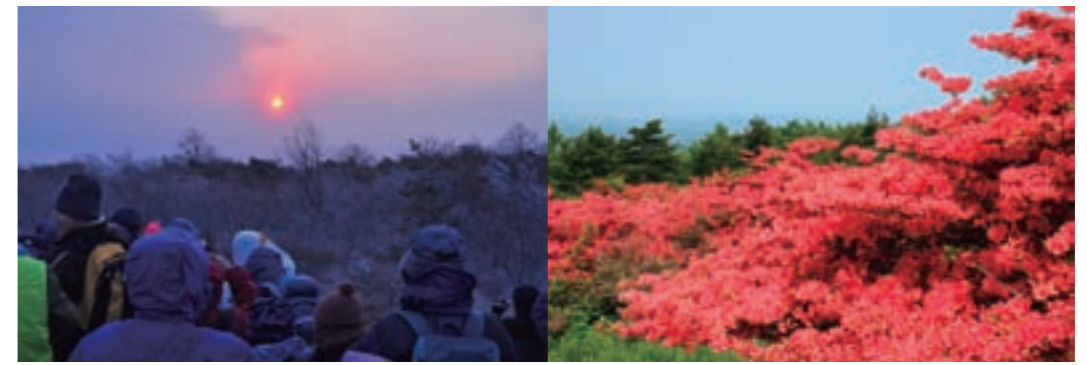


そばかけ

どんこのとも和え

寒大根とタラの煮物

冬



【其の二】 山頂からのご来光

【其の一】 大開平のつつじ



【其の四】 石倉展望台

【其の三】 南岳からの夕景

コラム ①

階上岳八景

中国の瀟湘八景を源とし、美しい景観に「八景」と名付ける習わしがあります。ここでは階上町民の誇る歴史と自然に恵まれた階上岳周辺の景観を、「階上岳八景」として紹介します。



【其の六】 寺下川と寺下の滝

【其の五】 町営放牧場



【其の八】 奥の院

【其の七】 寺下観音鐘撞き堂

「里」を味わう

【案内人】土橋美智子さん（はしかみグリーン・ツーリズム協議会会長）

里地・里山は、自然そのものの奥山に対し、人間が入り込んで利用したり共生したりする山麓の農山村地域を意味します。しばしば「日本の原風景」という意味でも用いられるようです。

農山村には、自然環境を守り安全な食料を作るという役割のほか、水資源涵養機能や伝統文化を維持・継承する働きもあります。また、土地に根ざす旬の食材をその土地の料理方法で味わう郷土料理は地域の大切な食文化でもあります。

ここでは、はしかみグリーン・ツーリズム協議会会長の土橋美智子さんの案内で、高校生の修学旅行ファームステイを中心に、階上町の「里」の味わいをご紹介します。

日本の原風景ともいべき景観と働きを持った「里地・里山」は失われつつありますが、階上町にはまだまだ健在で、様々な活動に結びついています。

階上岳のような「奥山」に対し、「里地・里山」という言葉があります。「里山」は森林生態学者の四手井綱英氏が「集落や都市の近くにあつて人間が入ったり木の実を採ったり遊んだりできるところの山」という意味で、昭和三十年代から使い始めたということです。

また、「里地」は平成六年（一九九四）十二月に閣議決定された環境基本計画に「農業など」人間の働きかけを通じて環境が形成され、野生生物と人間とがさまざまな関わりを持ってきた地域で、古里の風景の原形として想起されてきた」と位置付けられています。

いずれも日本の原風景ともいべき姿なのですが、高度経済成長期以降の農業の衰退によって、その機能は失われつつあります。幸い階上町には階上岳の南西麓、田代・晴山沢・平内・金山沢あたりには里山景観が健在で、グリーン・ツーリズムを縮結しました。このうち八戸市・三戸町・田子町・南部町・階上町で連携し、グリーン・ツーリズムの情報発信などを推進することになりました。

階上町においては平成十七年に「はしかみグリーン・ツーリズム協議会」が発足し、教育旅行の受け入れほか、梅もぎと梅漬け作りなど、「はしかみの自然満喫シリーズ」と銘打った事業も展開しています。その土橋美智子会長に、活動の様子と階上町の「里」の魅力を紹介してもらいました。

協議会発足以来、修学旅行生などの受け入れ実績は六年間で三六九名。受け入れ農家が四軒と少ないのが悩みの種です。

協議会は発足したものの、悩みの種は受け入れ農家（会員）が少ないことです。設立当初は田代の土橋さんと金田秀子副会長の二人、その後、松倉チエさん（金山沢）、鳩恵子さん（平内）が加わり、現在は四人での活動です。

修学旅行生などの受け入れ実績は、平成十八年が八戸市の白銀中学校六名、十九年は大阪の初芝富田林高校二名、京都の洛南高校付属中学校九名の合計二名、以降は大阪、京都の中・高校生が二十二年に二八名、二十一年に三九名、二十二年に二七名、二十三年に五八名と



「けやきの小道」を散策



土橋信夫さん（左）も一緒に夕食の食卓を囲む



ファームステイした初芝富田林高校の生徒3人と夕食の準備をする土橋さん



はしかみグリーン・ツーリズム協議会会長の土橋美智子さん



秋の里山。背後は階上岳（晴山沢）



ジャガイモ掘り体験



郷土料理や自家製野菜をたっぷり使った夕食

なっており、六年間で総計三六九名を数えています。二十三年に減少したのは東日本大震災で、中止した学校が三校あったためです。

土橋さんは高校時代の三年間を除いて階上町で暮らし、昭和五十年（一九七五）から田代の実家で農業を継いでいます。里山のよさは若い頃から実感しており、平成六年に海外でグリーン・ツーリズム

リズムの受け入れや「水と土と里の集い」（金山沢）「ふるさと資源保全事業」（田代）などの活動がなされています。

日本では西欧と違って長期休暇制度が確立されていないため、短期間の体験を主とした日本式グリーン・ツーリズムになつていますが、近年、修学旅行などの体験型教育旅行などに取り入れられるケースが増えており、青森県では二〇二三年度の受け入れ目標数を現状の二倍となる二万人に設定しました。

平成二十二年（二〇〇九）九月二十四日、当町ほか三戸町・五戸町・田子町・南部町・新郷村・おいらせ町の七町村は八戸市と「八戸圏域定住自立圏形成協定」

を締結して以来、そのよさを発信しているのは農業を実践している自分たちの義務とさえ思うようになったとのこと。

土橋さん宅へファームステイした初芝富田林高校の生徒九名がファームステイで来町しました。これは北海道方面への修学旅行の一環として三沢・三戸地区へ民泊するもので、同校は平成十九年以來、五年連続の常連客となりました。

二日の十七時に八戸市の南郷公民館で対面式が行われ、それぞれ挨拶や自己紹介後、生徒は各農家へ分散していきました。階上町では土橋さん、金田さん、鳩さん宅で各三名ずつ受け入れることになり、ジャガイモ掘りや雑穀の収穫などの農業体験がセットされています。ここでは代表して土橋さん宅での二日間を紹介します。

十七時五十分土橋さん宅に到着したのは三名の男子生徒。犬の太郎、レン二匹の迎えを受けたあと、当主の土橋信夫さんから「ともかくも、田舎を満喫してほしい」との挨拶がありました。

その後、お父さん（信夫さん）、お母さん（美智子さん）役の二人の紹介や、田代地区の歴史・民俗芸能などの話を聞いているうちに少しずつ打ち解け、土橋家の建坪百坪以上の古民家を案内された時には、三人とも歴史好きらしく、その柱や梁、神棚の重厚感に興味津々でした。

次いですぐに夕食作り。メニューは、せんべい汁、イカ飯、揚げナスの味噌和え、もろキユウ、パプリカ・ピーマン・ゴーヤ・ヘチマのサラダや炒めもの等々で、美智子さんを手伝いながら一緒に調理しました。

思いがけなかったのは、三人が味噌をつけて太いキュウリをバリバリと食べたこと。ファストフードに慣れた若者には、新鮮な野菜そのものがごちそうだったようです。

いよいよジャガイモ掘りに挑戦した生徒たちは早々にダウン。その後は瑞々しいスイカに息を吹き返し、夕方は田舎の景観に浸りました。

二日目は七時に起床して「せせらぎ公園」で犬の散歩をしたあと、畑でキュウリの収穫をし、朝食はサケの焼き魚、佃煮、塩辛以外はもぎたての自家製野菜を一人五千円相当のお土産が送られるとか。その時には再び、心にしみて残った田舎の味を思い出すことでしょう。

協議会では、まずは地元の人々に里山の暮らしの素晴らしさを再認識してもらおうと、「はしかみの自然満喫シリーズ」を展開していきます。

グリーン・ツーリズムは、今後、体験メニューを増やして、修学旅行生を標準としていたターゲットを首都圏の観光客や外国人にも広げていくことが求められています。しかし土橋会長は、まずもって地元の人々が里山の暮らしの素晴らしさを再認識することが大切と語ります。

そこで協議会では、「はしかみの自然満喫シリーズ」を展開、平成二十一年七月から十二月にかけて、初回イベントとして階上早生そばを中心とした全五回の体験メニューを実施しました。それは金山沢の松倉会員の農園を借り、七月に「そばの種まきと梅狩り」、八月に「そばの花見とせせらぎウォーク」、十月には「そばの刈り取りと鳥立て」「そばの脱穀と棒パンづくり」、そして十二月には「そば打ちあるいは料理体験」を行うというものでした。（24～25ページ参照）

町内外の参加者から上々の感触を得た協議会では、その後も「梅もぎと梅漬け作り」「はたるまつり」「豆腐作り」など



「水と土と里の集い」が行われるふるさと河川公園（金山沢）



金山沢行政区域長の松倉長一さん



梅もぎをする参加者（松倉農園）



最後の夜のバーベキューパーティー



東屋でスイカをほおぼる3人



自家製味噌付き豆腐ステーキ、そうめんカボチャ、生野菜、漬物、伝統料理のにこもり（真真中）



「はしかみの自然満喫シリーズ」の豆腐作り（農産物加工施設）



ビオトープの「どじょうの田んぼ」



田代地区振興計画実行委員会委員長、田代地区ふるさと資源保全会会長の土橋信夫さん

のメニューを実践しています。平成二十三年十二月十三日に行われた豆腐作りでは、煮干しの出し汁でゴボウ、サツマイモ、ニンジン、シイタケ、焼き豆腐、コンニャクの具に葛湯を入れた伝統料理の「にこもり」も作られ好評でした。

里地・里山の魅力を伝えるのは、グリーン・ツーリズムのほか、金山沢行政区や田代地区振興計画実行委員会などによる活動もあります。

そのほか、里地・里山の魅力を伝える活動は、金山沢行政区（松倉長一区长）の「水と土と里の集い」があります。こ

堪能。九時からは早速、ジャガイモ掘りに挑戦しました。

この日も朝から蒸し暑く、畑の土からは草いきれが立ち昇ってくるようでした。畝沿いに力任せに掘っていた三人は、わずかに五分ほどでダウン、一定のリズムで掘り進む信夫さんを見て、農業には熟練したコツが必要なことを知ったようです。でも一休みに畑のそばの東屋でスイカをこちそうになり、その瑞々しさに生き返ったようでした。

その後、シイタケとミョウガを薬味にしたそうめんイカ飯、天ぷら、もろキユウ、シイタケ煮の昼食をとり、バラの芽摘みに挑戦して農業体験は終了。夕方の自由時間には土橋家周辺の「けやきの小道」や、ビオトープとして造った「どじょうの田んぼ」を散策し、夕食は土橋さんが丹精を込めて飼育した無農薬ハーブ豚でバーベキューを楽しみました。

引率の先生の話によれば、五泊六日の修学旅行後の感想文では、毎年、ほとんどの生徒が観光地の物見遊山よりもファームステイの方が思い出深いと書くそうです。十二月になれば、改めて各農家か

れは、平成元年に整備された同地区の「ふるさと河川公園」を利用したもので、八戸平原土地改良区と共催で魚のつかみ取りやジャガイモ大物コンテストなどを行うイベントです。この行政区では「龍神こだま太鼓」の後継者育成活動もしています。

また、平成十九年度豊かなむらづくり全国表彰事業で東北農政局長賞を受賞した田代地区振興計画実行委員会（土橋信夫委員長）では、「せせらぎ遊歩道歩こう会」を開催、田代川流域の里山を楽しもうと、今では町内外から百名前後が参加する恒例イベントになりました。

前述したビオトープの「どじょうの田んぼ」は、田代地区ふるさと資源保全会（土橋信夫会長）によるもので、農水省の土地改良事業における農地や水路の点検、草刈り、補修を行うほか、環境活動の一環として取り組みました。

土橋会長所有の休耕田約一四アールを重機で起こし、近くの沢から水を引いてドジョウやタニシを放流、自然の生態系や景観を復活させ、里山の原風景をよみがえらせようという試みです。

「海」を歩く

「案内人」——有谷升さん（階上売り込み隊長）

階上の漁業は「採る漁業からつくり育てる漁業」へ転換し、施設整備も着実に進んできましたが、東日本大震災で大きな被害を受けました。

昭和時代からの漁業の大きな出来事を見てみると、昭和二十四年に小舟渡・榊・荒谷・大蛇に漁業会が設立され、その後、昭和三十六年（一九六二）には四つの漁業会が合併し、階上漁業協同組合が結成されました。

ハード事業では、昭和二十七年に大蛇・追越・榊漁港が階上村管理第一種漁港に指定されてから、県や国による漁港整備がたびたびなされていますが、四十八年にコンブ・ワカメ・ホヤの増殖事業が開始されたのは大きな転機でした。漁業資源の減少とともに、五十二年以降は二百カイリ時代に突入しており、「採る漁業からつくり育てる漁業」への転換が求められてくるようになったからです。階上では五十四年、追越地区に県立栽培漁業センター（第一期工事）、大蛇海岸に

平成二十二年六月二十三日、「階上売り込み隊」が発足。東日本大震災後も「第二回階上どんこ祭り」を開催し、復興を支援しました。

沿岸部の振興は漁業だけではありません。昭和四十六年（一九七二）には第二回観光漁業祭を開催するなどし、観光面にも力を入れるようになりました。町最大のイベントになった「はしかみいちご煮祭り」は、六十一年に第二回を開催しています。今では会場となる小舟渡海岸に、近隣市町村から四万人を超える観光客が訪れる本町最大のイベントになりましたが、毎年、七月末に行われるこの祭り前後の季節は、まとまった入り込みがあるとはいえないのが現状です。そういった状況を打開し、通年賑わいを見せるようにと、平成二十二年（二〇二〇）六月二十三日、「階上売り込み隊」（有谷升会長）が発足しました。

この会は会則で、「階上町の良さをPRするためにボランティア精神に則り、おもてなしの心でわかりやすくガイドすることを目的とする」と定めており、必ずしも「海」の観光PRに特化した活動をしているわけではありません。ただし、「海鳴りウォーク」や「どんこ祭り」を中心に、海岸部の魅力を発信している唯一の組織でもあります。

発足後すぐに、七月二十四日にはJ

里山だけではなく「里海」という言葉もあります。ドキュメンタリスト瀬戸山玄氏の著書『里海に暮らす』で、「海辺の生態系と人間の営みとが分かちがたく結ばれ、バランス良く風土を醸す関係」をそう呼びました。階上の東の海岸部は天然の良港として早くから開け、小舟渡海岸は江戸時代、藩主の浜遊びの場所でもありました。その後、磯物漁、刺し網、延縄、巻き網漁業へと進出し、栽培漁業へ転換してきましたが、東日本大震災で大きな被害を受けました。今回は、階上売り込み隊長の有谷さんに案内していただき、往復約八キロの「海鳴りウォーク」に同行し、階上町の海の復興の様子とその魅力を紹介します。

種苗供給施設が完成し、時代の要請に对应しています。

その後は全国の漁業に共通する後継者問題などを抱えつつも、六十一年に海産物簡易加工処理センター、平成十一年（九九九）には大蛇地区の漁業集落排水処理施設が完成するなどして今に至っていましたが、平成二十三年（二〇二二）三月十一日に発生した東日本大震災によって、沿岸部を中心に大きな被害を受けました。

階上町災害対策本部のまとめによると、漁船は登録船二六〇隻のうち約半数の二四隻が流失、そのほか荷さばき所、作業施設、排水処理施設、漁具、漁場水産物など、町全体では約三億三三〇〇万円の被害額でした。

しかし、町民や漁業部会員らによって復興の輪が広がり、徐々にではありますが、美しく豊かな階上海岸が戻りつつあります。

東日本主催の「駅からハイキング」で、階上駅—小舟渡海岸—大蛇駅まで県内外から参加した三四人をガイド。昼食には第二五回いちご煮祭りの会場で、いちご煮や生ウニ丼のもてなしがありました。次いで九月二十七日は健康教室修了生らを対象にした「海鳴りウォーク」、十月二十四日は町内二〇カ所の「巨木めぐり」、十一月六日—二十八日「そば打ち講習」、十一月十八日「イカ料理教室」、十二月十二日「どんこ祭り」のイベントを開催、二十三年二月二十八日には案内マップも作成し、二十三年度の活動を待つばかりでした。東日本大震災が襲ったのは、そのすぐ後だったので。

今となれば売り込み隊の結成は、一つの救いとなりました。七月三十一日には「がんばろうーはしかみ復興市」大蛇」が実行委員会組織で開催され、十一月十三日には震災復興祈願として、売り込み隊長、階上漁業協同組合・階上早生手打ちそば愛好会共催による「第二回階上どんこ祭り」が予定どおり行われ、復興の後押しをすることができたのです。ここでは売り込み隊長の有谷さんに案内していただき、平成二十三年九月二十八日に開催された「海鳴りウォーク」を中心に、階上町の「海」の魅力を紹介します。



遊歩道を歩く参加者



岩手県との境界を示す「堺」の文字が彫られた県堺石



「第二回階上どんこ祭り」には、雨にもかかわらず町内外からたくさんの方が訪れどんこ汁に舌鼓を打った（平成23年11月13日／荒谷生産部会前）



階上売り込み隊長の有谷さん



「がんばろうーはしかみ！」ののぼり旗が立った復興市（平成23年7月31日／大蛇漁港）



種差海岸を北限とするハマギク



観音平を見渡しながら説明を聞く参加者



青森県最東南端の階上灯台

秋晴れの下、県堺石から追越まで往復約八キロのウォークを開始。遊歩道を歩いて階上灯台と赤石大明神へ向かいました。

秋晴れに恵まれたこの日は、九月下旬というのに、歩いていけば汗ばむほどの陽気でした。午前十時、階上灯台駐車場に集まった参加者は健康教室受講生などを含め町内外から二三人、単に海浜景観に浸るだけではなく、健康志向のウォーキングが目的だった人が多いようです。

行程は県境から追越までの往復約八キロで、まずは階上町東南端、岩手県洋野町との境界からスタートしました。この一帯は廿一と呼ばれ、県境には廿一川が流れていますが、その河口延長に「堺」と彫られた県堺石があり、コンブ拾いをする人がいました。

ここから赤石大明神まで約七〇〇メートル間は遊歩道になっており、県最東南端に位置し県内で一番早く朝日を見ることのできる場所として有名な階上灯台や、寺下の観音さまが牛の背中に乗って上陸されたと伝えられている観音平があります。境内には津波記念碑がありますが、幸い今回の大震災ではほとんど被害はな

かな初秋の海でした。

ここからわずか二〇〇メートル、小高くなった泊川神社へ。その昔、大ダコを鎮めようと建立されたため、通称「たこ神社」といわれるとか。神社裏手に広がる海の眺望は絶景でした。

次いで、浜辺となっているこじら浜を経て津波記念碑へ。海岸線に小舟渡、大蛇と三つある記念碑の一つで、昭和八年（一九三三）三月三日の三陸大津波の犠牲者を悼んで建立されたものですが、参加者は神妙な面持ちで説明を聞いていました。

神漁港から、のろし場があったという高台の赤松林を抜けて追越漁港へ。十二時ちようどに到着し、片道約四キロの行程を終えました。

津波記念碑から神漁港まで五〇〇メートル、岩礁が連なる階上海岸らしい風景が続きます。昭和十二年（一九三七）に八戸市の種差海岸は国指定名勝になりましたが、その理由の一つが「大小無数の奇岩怪石」でした。現在、八戸市の蕪島から福島県相馬市の松川浦まで約三五〇キロを、三陸海岸トレイル（長距離歩道）で結ぶ「三陸復興国立公園」（仮称）構想が進展中ですが、実現すれば種差海岸と階上海岸を結ぶラインは岩礁の地形美として脚光を浴びるに違いありません。



海を眺めながら昼食をとる



追越漁港そばでイカを干す浜の人



神漁港をあとに高台の山道に登る



小魚の群れをのぞき込む参加者



小舟渡漁港。津波は背後の作業小屋の土台を越えた

「海鳴りウォーク」後、「第二回階上町巨木めぐり」を開催。町内の古木・巨木は海と里と山をつなぐ役割として期待されています。

巨木めぐりは二四キロの区間で合計一〇本の古木・巨木を見学するバスツアーで、一町内に全国や県最大級の巨木がこれだけ集まっているのは大変珍しいとされています。階上岳にもアカマツやシナノキなど、まだまだ知られていない巨木があるそう、有谷さんはこの巨木めぐりを階上町の海と里と山をつなぐ役割にできればと考えています。

やがて神漁港へ到着。ここから大蛇までは津波被害が多く、未だにその爪跡が生々しく残っていました。ここからは山道を登って唯一、海岸線を離れます。かつてのろし場があったという高台の赤松林を抜けて追越漁港へ。

再び海辺へ下りると浜小屋のそばで女性がイカを干していました。「津波のあとに、石ころみたいにウニが上がっていた」と言いながら手を休めずに作業を続ける姿に、浜に生きる人々の思いを感じました。



平野家のサイカチ。樹齢約800年、樹高約15m、幹周り6.4mで全国3位の巨木（角柄折平/町指定天然記念物）



昭和8年の三陸大津波犠牲者を悼んだ津波記念碑



泊川神社の眼下に干潟と海を眺望する

く、遊歩道脇には種差海岸を北限とするハマギクが咲き誇っていました。ここから約八〇〇メートルで小舟渡漁港へ。海に面した作業小屋の土台コンクリート部分を越えた津波で荷さばき所も被害を受けましたが、港内には八隻ほどの漁船が停留し、小舟渡らしきを取り戻しつつありました。

道仏漁港から神津波記念碑へ。途中、泊川神社へ立ち寄り、眼下に広がる太平洋の絶景に見入りました。

十一時十分道仏漁港へ到着。起点から約二キロで途中、浜辺に打ち上げられたトチの実や路傍にホオズキなどを見つけ、参加者はしばしば海を忘れて「トチの実」は湿布薬に「など、昔話に花を咲かせていました。港に流れ込む道仏川ではサケが遡上すると聞いてのぞき込む参加者も。突堤では釣り人の姿も見かけました。有谷さんとともにガイドした隊員の熊谷登さん（町水産経営アドバイザー）からサケの母川回帰の話や町の魚アブラメの魚名由来など聞きながら、あくまでこの



ハマヒルガオ／代表的な海浜植物で砂浜に群落をつくる。砂の中に地下茎を伸ばす（開花時期：5～7月）



ハマエンドウ／海岸付近に場所を選ばず生える。若い実は食用になる。スイートピーの仲間（開花時期：4～8月）



ハマハタザオ／海岸の砂地に生え、群れをつくり白い花を咲かせる（開花時期：4～6月）



ニッコキシゲ／山地や海岸の草地に群生するユリ科の草本。一日花（開花時期：6～8月）



ウミドリ／北の海の潮だまりに植生し、緑の美しい群れが見られる（開花時期：6～7月）



ハマナス／北国の夏の浜を美しく彩る野生のバラの一種。花は強い香りがあり香料として使われる（開花時期：5～8月）

コラム ③

階上の海浜植物

階上海岸は、奇岩怪石のある岩礁地帯や砂浜など変化に富んだ地形が特徴で、北上山地の植物区系に含まれる多様な植物にも出会うことができます。

ここではその中から代表的な12点の海浜植物を、階上売り込み隊の有谷升さんの写真と解説で紹介합니다。



エゾフウロ／ハクサンフウロの変種で、海岸の草地に生える。がくに毛が多い（開花時期：7～8月）



ナミキソウ／青紫色の花は遠くからでもよく目立つ。水際の近くの草地や芝地などで見られる（開花時期：7～8月）



スカシユリ／大きい花でひと際目立つ。代表的な海浜植物（開花時期：6～8月）



ハマギク／種差海岸を北限とする日本特産の半低木の野菊で花が大きく美しい（開花時期：9～11月）



カワラナデシコ／秋の七草の一つでエゾカワラナデシコの変種（開花時期：7～9月）



ラセイタソウ／海岸の崖や岩の間に生える多年草。葉が厚く粗い毛が密生する（開花時期：7～9月）